



技術と心について

株式会社トーエネック 取締役会長 井上丈太郎

20世紀が終りに近づこうとしている。振り返って見て、私はまことに変化の多い時代の中に生きて来たものだ、とつくづく思う。科学技術の進歩がこの激しい変化をリードし、今日の文明社会が形成されたのだ、と言っても過言ではないであろう。まことに、技術は人類にさまざまな便益や快樂を伝え、われわれは日夜それを享受して生活をしている。反面、技術はまた同時に魔性を持つ。核兵器を例に持ち出すまでもなく、電機工場において優れた特性を示したフロンやPCBも、思いも掛けぬ魔性を見せてしまった。

少々脱線したが、変化は今も進行を続けている。われわれは現在、情報化・国際化・高齢化という三つの特徴的な変化に直面している、と言われている。このうち、情報化が電子通信技術の発達に負って進んでいるのは自明であり、国際化もまた陸海空交通技術の進歩に基づくものである。技術と関係の薄いように見える高齢化にしても、高齢人口の増加と若年人口の減少によって発生するものであり、それは医療技術の発達が寿命を延伸させ、避妊技術の普及が出生を抑制した結果にほかならない。このように、千変万化する時代の流れの底には、何らかの形で科学技術が介し影響している様子が見られる。この姿は将来とも続くであろうし、科学技術の重要さはいよいよ増して来るように思われる。国家の興亡、企業の盛衰は、勿論その体制や指導者の能力によって左右されるけれども、各々の保有する技術のレベルが物をいうことになる、と考えられる。こんなに大上段に構えて議論するまでもなく、技術を尊重しないようでは、これからの競争社会の中で発展成長していくことはできない。企業の所有する管理技術・製造技術・技術開発力の差が勝負を決めることになる。

ところが、理屈ではわかりきったことであっても、現実のこととなると、必ずしも資金や人材に恵まれない中堅企業以下では、従業員の教育をすることから始めて、社内の風土を変え、技術のレベルアップをはかることは、口でいうほど易しくはない。貴重な金と人を無制限に注入することはできないし、また即効は期待できない。道の甚だ遠いのを知りながら、敢えて浮上を執行するためには、経営者はよほど覚悟を決めてかかる必要がある。

次に私は、技術は力を内蔵しているが、それ自体だけで威力を示すものではなく、心あるいは魂が伴い、こもっていなければ役に立たないことを記して置きたい。人類は、物質的な面においては歴史とともに着実に進歩をして来た。しかし、毎日の社会の動き、退廃の模様を見ると、精神文明は物質文明の進歩に取り残されており、時には退歩したのではないかとさえ思われる節がある。それにも拘らず、現代人が基本的には心の豊かさや安らぎ、高潔な精神を理想としていることは疑いない。われわれ技術を業とする者は、物を造ることに生きがいや喜びの存在することを認識し、それを目指さねばならぬと思う。技術を取り扱う人びとの心の中に、しなやかさ、温かさ、親切などが伴ったとき、製造現場においても、工事現場においても、はじめて顧客に迎えられる製品を生み出し、信頼の絆を得ることができ、社会の進歩に貢献することになると信じている。

以上甚だ一般論的な形で記述したが、これは私がトーエネックの責任を負って以来7年近くの経験に基づく痛切な実感である。

一方、愛知電機さんでは川口社長の下で、永年にわたって困難を克服され、変圧器をスタートとして次第に多くの技術を開発、蓄積された。社内の人間関係の良いことも最近の具体的な事例を通じて承知している。そのご努力の成果として、最近とくに大輪の花が一せいに咲くように業績の躍進を遂げておられる様子を拝見し、深い感銘を覚えている。私はぜひこれを範として、遅れることのないよう後に続かねばならぬと思っている。